

鶴見文化財学会報

Tsurumi Cultural Properties A.C

vol.16
2015年3月13日発行
鶴見大学文化財学会

では、いつ「好き」になったか

小林 恭 治

平成26年11月15日、総持学園創立90周年の記念式典が開催された。その際に配布された記念誌を捲ったところ、附属高校の沿革が興味深く思われたので、巻末の「学園年表」から関係記事を抜粋し、紹介する。

- ・大正13年（1924）4月
光華女学校設置。横浜市中区大岡町 総持会館
- ・同、9月
学校を大岡町より大本山總持寺香積台に移転
校舎を現在地（206m²）に移転
- ・大正14年（1925）2月
鶴見高等女学校設置
- ・昭和5年（1930）5月
光華女学校を鶴見女子職業学校に校名変更
- ・昭和6年（1931）10月
鶴見女子職業学校を光華女学校に校名還元
- ・昭和12年（1937）4月
光華女学校を鶴見第一女学校に校名変更
- ・昭和18年（1943）3月
午後5時50分、本校出火。講堂を残して全校舎焼失
- ・昭和19年（1944）1月
学園の経営母体を財団法人総持学園とする
- ・同、4月
鶴見第一女学校を鶴見女子実業学校に校名変更
- ・昭和21年（1946）11月
校舎（慈眼館）竣工。復興祭
- ・昭和22年（1947）4月
六・三・三制実施に伴い新制鶴見女子中学校を設置
- ・同、11月
鶴見女子実業学校を鶴見第一女学校に校名

還元

- ・昭和23年（1948）4月
鶴見第一女学校、鶴見高等女学校を合併統合し、新制鶴見女子高等学校を設置
- ・昭和26年（1951）3月
財団法人総持学園より学校法人総持学園に組織変更
- ・平成19年（2007）4月
鶴見女子中学校・高等学校を鶴見大学の附属とし、鶴見大学附属鶴見女子中学校・高等学校に名称変更
- ・平成20年（2008）4月
鶴見大学附属鶴見女子中学校・高等学校を鶴見大学附属中学校・高等学校に名称変更し、制服改定男女共学

附属高校の名称は8回も変更されているが、極めて短期間で、還元、変更されたこと、「第一」のみで「第二」がないなどの理由については、記念誌に説明がない。

情報が欠落した状態を「謎」と言う。

4年生が卒業論文のテーマ選びに苦労するのは、好きなものを調べようとするからではないか。「好き」の理由が、既存の情報を信じたことに由来するなら、そこに疑問は生まれにくい。常識からの脱却とは、常識の破棄ではなく、常識への発問である。観察眼、好奇心、調査力。一般には、心身のゆとりがないと発動しにくい素養である。選択肢を「好き」に限定する理由が、ゆとり不足からならば、観察眼は曇らないだろうか。

個人の好みにかかわらず、「謎」は常在する。自分を少し大きめに作っておく準備は必要だが、卒論に「好き」という条件はない。

文化財学会 春季大会・秋季シンポ関連報告

平成26年度春季大会

『武田信玄を支えた黄金

-科学調査から甲斐の金生産技術を解き明かす-』

報告 4年 千崎 徹也

3年 佐々木歩美

2年 二村 茜

平成26年度春季シンポジウムは去る6月7日土曜日、本学大会館にて『武田信玄を支えた黄金-科学調査から甲斐の金生産技術を解き明かす-』と題して、国立科学博物館理工学研究部科学技術史グループ研究員 杏名貴彦先生にご講演頂いた。

山梨では金貨が出土しており、武田信玄が命じて作らせたのではないかとされている。しかし、金貨の生産技術はわかっていない。

16世紀には金山銀山の産出と衰退の時代を迎え、我が国は多くの金銀を世界に配給していたためヨーロッパからは「黄金の国ジパング」と呼ばれていた。

金の生産においては、砂金の採集から始まり、のちに柴金とよばれる金鉱脈を露出掘りし、山金と呼ぶ金鉱石を精錬する方法へと変化していったと考えられる。

金は銀などとの合金の状態で見つかることが多く、その割合は鉱脈によって異なる。そのため、金と銀を分離する技術が必要になった。分離には火を用いない「採鉱」や「選鉱」、火を用いる「製錬」がある。金、銀、銅が含まれる鉱石の場合には、塩を用いる焼金法・硫黄分銀法や鉛を用いた銀製錬技術がある。これらの技術を複合的に利用することで金、銀、銅を生産しており、多くの遺構や遺物からもそのことが確認されている。山梨におい

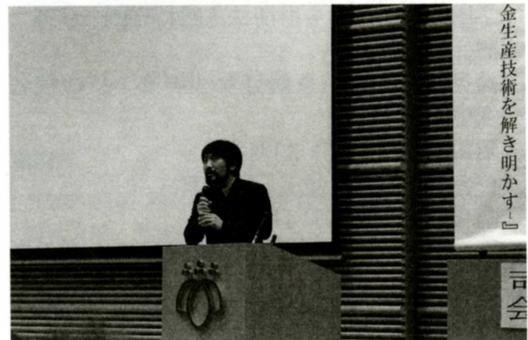
ても製錬技術解明の手がかりとなるような遺物が出土しており、その遺物からも同じような情報が得られている。

鉱山遺跡、中世城館、城下町遺跡から金属生産に関連する遺物が出土し、それらの表面から実体顕微鏡・X線・蛍光X線・X線マイクロアナライザー付走査型電子顕微鏡などの分析機器を使用し、金や銀を分析している。実体顕微鏡は、遺物に付着する金の細粒子の確認を行い、X線による透過撮影で金属粒子やその他重元素類の付着状態の確認を行っている。蛍光X線分析では、金粒子に含まれる元素やその周辺に付着する元素を判別した。X線マイクロアナライザー付走査型電子顕微鏡では、金粒子の微細観察と元素のマッピング分析を行い、表面に付着する元素の状態を詳細に観察した。

調査対象の金山遺跡には、かわらけに鉱物の付着物などが見られる黒川金山遺跡、3点ほど金銀の付着物が見られる中山金山遺跡のほか梓久保金山遺跡がある。次に城館遺跡では、水溜と鍛冶遺構が見られる勝沼氏館跡、他の地域のものともみられる銀が出土した武田氏館跡、金と銀の合金が出土し金山と城下町の関係が見えてきた甲府城下町遺跡があり、この中にはまだ調査中の遺跡がある。

金生産の流れを把握するには研究途中の段階なので、将来的には新たな成果が期待できると講演を結ばれた。

講演後は聴衆者との質疑応答が行われた。



平成 26 年度秋季シンポジウム
『仏教の現代と仏像研究の展望』

報告 3年 佐々木歩美
1年 岸 なつみ

平成26年度秋季シンポジウムは去る11月1日土曜日、『仏教の現代と仏像研究の展望』と題して以下の内容で開催された。

- ・ 本学准教授 下室寛道氏
「現代の仏教文化—本堂新築を通して—」
- ・ 本学大学院博士前期課程2年 水落絢香氏
「曹洞宗大本山總持寺の英蒔
～御移転をめぐる～」
- ・ 本学准教授 緒方啓介氏
「鎌倉宋風様式の源流
—中国宋代彫刻に見る着衣形式と坐形式—」
- ・ 本学大学院博士前期課程1年 西下正純氏
「大足・安岳石刻における風化の現状
～四川省の風土や気候の点から～」

下室氏は、自身の関わった養国寺本堂新築の事例をもとに、現代仏教における変化するもの（＝形）と変化しないもの（＝思想、考え方）について考えを述べられた。本堂の設計は、禅宗が大陸文化の発信拠点であったことや禅とキリスト教に共通性があること、總持寺の先進的な伽藍配置などに着目して考えられている。しかし、本堂新築の根底には過去から続く変化しない思想があり、我々が守るべき文化財がどのような意図で造られたかを考えなければならないと結ばれた。

水落氏は、總持寺移転に関する経緯や移転後の動向について述べられた。明治38年に諸堂伽藍が焼失したことにより首都東京に移転することになるが、移転に際し、總持寺の歴史と共に生活してきた能登の住民による反対運動も行われた。そのため別院という形で現

在の地に移転することになるが、旧来の地には祖院として再建もされている。總持寺の御移転の実現は、現在の曹洞宗の発展をもたらした点で重要な意義を持つと結ばれた。

緒方氏は、鎌倉地方の中世彫刻に見られる宋風様式について、中国四川省に残される南宋時代の石仏と比較検討を行った。鎌倉地方では、禅と共に流入した宋風様式である「法衣垂加形式」や「宋風半跏形式」等の影響を受けた作例を見ることができる。これらの源流は南宋や高麗の請来仏、大足石刻や安岳石刻に見られる形式に類似しており、ここに源流をもつのではないかと述べられた。今後の課題としては四川省内外の石刻の調査や中国・日本僧の足取り調査等を挙げられた。

西下氏は、重慶市の大足石刻と四川省の安岳石刻で見学したことをもとに、石刻の現状や石造文化財の劣化要因、各石刻の保存・修復の違いについて述べられた。大足・安岳石刻は温暖湿潤な四川盆地に位置し、石刻は硬質な砂岩の急崖に見られることが多い。石造文化財は、風雨等の影響を大きく受けてしまうため、現状を維持していくためにもその地域の特性を把握し的確な保存や環境の整備を進めなければならないこと等が述べられた。

講演後に本学文化財学科准教授である星野玲子氏が司会を務めたパネルディスカッションでは質疑応答が行われ、各質問者に対する質問が活発に交わされた。



実習の感想

実習Ⅳ国内旅行 北部九州の文化財巡検を終えて

緒方 啓介

今年度の実習Ⅳ国内旅行は「北部九州の仏教美術と史跡を巡る」をテーマに、9月1日から7日までの6泊7日で行った。参加学生は16名。引率教員は緒方と下室先生。4日目まで大学院生の西下君も特別参加した。

北九州地方に残る宗教文化を中心に見学を行い、中央文化との関連・大陸文化との交渉・豊後地方独自の石造物や九州地方の仏教美術についての見識を深め、併せて佐賀吉野ヶ里遺跡・大宰府都府楼遺跡・元寇防塁遺跡などを見学して、考古学的見地からも九州の歴史を考えることを目的とした。

7日間の行程は以下のとおりであった。

○9月1日(月) 曇りのち雨

午前羽田空港発→午後大分空港着。貸切バスで臼杵石仏へ。昼食後、臼杵石仏見学。豊後一之宮とされる杵原八幡宮では、小雨のなか宝物館で重文神宝類を展観。大分市内ホテル泊。

○9月2日(火) 晴れ時々曇り

大山寺で重文普賢延命菩薩像を拝観。鬼が一夜で積んだといわれる乱積み石の石段を登り、熊野磨崖仏を拝観。真木大堂では大型の藤原仏を拝む。昼食後に国宝高貴寺阿弥陀堂内部を拝観。豊後高田昭和の町昭和ロマン館では、昭和レトロを満喫した。豊後高田市内ホテル泊。

○9月3日(水) 曇り

大分県立歴史資料館・宇佐風土記の丘展観。宇佐・大楽寺ではご住職の丁寧な説明で収蔵庫内の重文仏像群を拝観。宇佐神宮参拝。昼食後、院内・龍岩寺拝観。懸造の礼堂と岩窟内に安置される神秘的な三体の白木丈六仏に感動した。天ヶ瀬温泉旅館泊。幻の焼酎「耶馬美人」を持込んでの中日の宴会で盛り上がった。

○9月4日(木) 曇り

日田・永興寺収蔵庫で、重文仏像群を拝観後、佐賀・吉野ヶ里遺跡に向かう。昨日の宴会の

せいか、さすがにバスの車中は静かだった。昼食後、吉野ヶ里遺跡を自由見学。早目に博多のホテルに入る。夕食が付かないため、各自中洲の街に消えていった。

○9月5日(金) 晴れ

宗像大社参拝。宝物館に展示される沖津宮祭祀遺跡出土品は圧巻だった。神湊港から連絡船で大島に渡り中津宮を参拝。昼食後、大島を散策。神湊港帰着後、志賀島金印公園へ。博多ホテル。

○9月6日(土) 晴れ時々雨

九州国立博物館で免震室・バックヤードを特別に見学し、九博今津氏・渡部氏の懇切丁寧な説明を受けた。改めて謝意を表したい。太宰府天満宮参拝後の昼食場所では、中国人の団体客と一緒に、あたかも中国で食事をしている奇妙な感覚であった。観世音寺では高倉住職に収蔵庫の重文仏像群や国宝梵鐘についてのご説明を頂いた。中でも国宝梵鐘をつかせて頂いたことは、学生たちの一生の思い出となろう。都府楼跡では資料館が臨時休館で、急に雨に見舞われたので十分な見学ができなかったのが惜まれる。最古の水田遺跡である板付遺跡では弥生館と遺跡の見学を行った。ホテル到着後に打ち上げを行い、各自この旅行の感想を述べた。

○9月7日(日) 晴れ

福岡市博物館で金印を見学した後、今津及び生の松原の元寇防塁遺跡を見学し、昼食後に福岡空港から帰宅の途についた。規則正しいとはいえない1週間で体調管理に苦慮していたようだが、全員最後まで集合時間を厳守したことは評価したい。



宇佐神宮本殿にて

〈実習Ⅳ・国外コース〉
国外巡検報告

小池 富雄

教員の参加は石田千尋教授と小池の2名。学生は18名であった。巡検の主たるテーマは、台湾・沖縄における其の風土が生み出した歴史、風俗習慣、信仰である。単純に国境で変わるのではなく、徐々に変化し、相互的影響を現地で見、感じるのが狙いであり、この観点から博物館、寺院、史跡などを巡った。台湾は、旧日本領土であり、現在も最も親日的な国である。沖縄は15、16世紀には海上交易で栄えた独立王国であり、第二次世界大戦後、米軍の管理下で米ドルを通貨に使用し、自動車も欧米並みの右側車線通行であった。日本へ返還されたのは、1977年だった。

台湾の南端の台南市から巡検の旅を始め、道教寺院の三鳳宮を見学。現地の人々の現世利益を願う姿や占いを見た。日本仏教の中にも、多くの道教的要素が含まれている。次いでオランダ統治時代の遺跡に立つ赤嵌楼、ゼーランディア城跡を見学した。台湾島南部の当地が大航海時代に、オランダにとって重要な拠点であった。しかし鄭成功の攻撃によって放棄することになった。日本の長崎平戸生まれと伝えられる鄭成功は、没落した明王朝を再興すべく大陸本土や台湾で戦ったが果たせなかった。現代では、ヨーロッパ勢力を撃退した偉人、台湾を開発した偉人として評価されて、巡検する各地に顕彰の像や記念碑があった。現在の台湾には民主化を果たし、日本植民地時代を懐かしむ親日家が多い。PCや携帯電話、電気製品など工業製品製造は世界最高水準であり生活は年々向上し、博物館・美術館も充実しむかっている。2011年、新築開館した広大な敷地に最新ジオラマをふんだんに盛り込んだ国立台湾歴史博物館は交通不便な台南市郊外にあり、江戸東京博物館の展示設計から多く学んでいるとみられる。建築外部には、巨大な太陽光パネルが全館を覆うようだった。

台北の国立故宮博物院は世界最大級の博物館ながら、さらに来年の2015年末には、中部

の嘉義に分館が開館する。日本製の新幹線「台湾高鐵」で北上し台北の市内に入ると、地下鉄・高速道路が整備され、この国の経済発展と文化水準の向上をうかがわせた。

空路北上して沖縄に入り、先ず信仰が内地とは違うのを実感した。世界遺産登録の斎場御嶽（セーファーウタキ）を見学の後に、高速船に乗り、神の住むという久高島に渡り、自転車で島内の遺跡を巡った。信仰のために立ち入り禁止の森、石組みが聖地として守られている。南の島の日差しは厳しかったが琉球の国産み神話の地を実際に歩き、生死観・信仰が大きく違うと実感した。2000年に世界遺産に登録された琉球王国の城（グスク）はじめ独自の歴史、風土、民俗、工芸、美術などを見学して過去と現在を往来概観しつつ、自らの身を置いて東アジアの相互的關係に思いを馳せることができた。見上げるとオスプレイや軍用戦闘機が飛行する地でもある。旅程の概略は下記。

- ・9月 7日 成田空港発—三鳳宮（道教寺院）
- ・9月 8日 高雄市歴史博物館—赤嵌楼—ゼーランディア城跡
- ・9月 9日 台湾新幹線で移動—故宮博物院
- ・9月10日 台北・桃園空港発→那覇空港着
- ・9月11日 斎場御嶽—久高島
- ・9月12日 座喜味城跡、読谷歴史民俗資料館
美術館、花織工房、浦添ようどれ、
浦添市美術館、沖縄県立博物館
- ・9月13日 首里城、玉陵、那覇市歴史博物館、
那覇空港→羽田空港。 以上



台北・国立故宮博物院にて

研究部会報告

江戸東京研究部会

私たち江戸東京研究部会は「歩くと歴史がみえてくる」をモットーに近世の江戸、近代以降の東京に関わる地域を対象とした巡検を中心に年に2~3回のペースで活動しています。

今年度は江戸時代以外の様々な時代の関連施設や史跡も巡検場所に加えようと計画していましたが、巡検場所が決まらず、さらに部員との予定が合わなかったということもあり、未だに活動は行っていませんが、今年の12月上旬を目途に江戸城跡周辺の巡検を企画中です。その他にも部員の興味・関心を重視するとともに、活発な活動を今後していきます、新規部員を増やしていけたらと思います。

歴史考古学研究部会

歴史考古学研究部会は主に考古学や文献史をテーマとする部会です。活動は毎週金曜日午後6時から考古学実習室で行っております。平成26年度は実習の授業で習った実測やトレス、拓本の作成、さらにはレポートのまとめ方、巡検での作法などの技術を実践し、さらにそれを応用して自己の研究に生かすことを目標とした活動を行っております。具体的には身近な浜辺から中世や近世、さらには古代の遺物が発見できるということに着想を得て鎌倉の由比ヶ浜や藤沢市の江の島付近で浜辺に打ちあがる陶磁器片を採集し、それを年代、種類に分け、その詳細を文章でまとめ、実測図やトレス図、拓本を作成し最終的に一冊の本にまとめる試みを行っております。そのためにフィールドワークとして資料採集のための鎌倉巡検なども行いました。来年度は海岸での採集活動だけでなく、陸地での採集や遠方への巡検、また今年度の活動をさらに発展させ、これらの資料の展示や発表などの活動を行おうとも考えております。

考古学や文献史だけでなく実物の実測、拓本などの作業、巡検、レポートを書くことができるので、興味のある方は是非一度見学にいらしてください。

古典芸能研究部会

古典芸能研究部会は、日本の古典芸能に直に触れる体験・鑑賞を行い、伝統文化を学ぶことを目的としている研究部会です。

平成26年度の活動は、例年通り東京成徳大学

の青柳隆志先生を講師としてお招きし、7月19日の午後に大学記念館のセミナー室にて夏の会と名付けて部員4名で「甲冑・武家装束体験」を行いました。先生に指導していただきながら自分たちで着付けを行うことができるのは、この部会ならではの特徴です。

着せる順番が決まっています、基本となる蝶結びを教えていただくところから始まりました。装飾品を足していくごとに動きづらくなっていくため、着せる側の配慮が重要になります。

甲冑は重いので、立った状態で順々に着せていきました。猛暑のなかでの体験だったため余計に暑く感じ、この格好で実際に戦にでて戦っていたのかと体験することができました。



写真左側の甲冑は式正具足と呼ばれ、馬に跨って弓を射る方法が主流だった平安から鎌倉時代に着用していたものです。弓を射る場合に戦う相手の正面となるのは左側なので、正面よりも腕が重装備となっています。右側の甲冑は当世具足と呼ばれ、鉄砲戦が主流だった室町後期から安土桃山時代に着用していたものです。正面を向いて鉄砲を撃つので、腕よりも正面が重装備になっています。このように、戦法の変化とともに甲冑のかたちも変わっていきます。

簡易的なものではなく、本格的な装束体験が出来たと部員からの声をもらうことができ、良い経験となりました。今後の活動として、11月末にシルク博物館への巡検・来年2月に冬の会と称して「雅楽体験」を行いたいと計画しています。

美術工芸研究部会

美術工芸研究部会は、絵画・漆芸品などの美術品や工芸品を扱った博物館や美術館の巡検をし、幅広い知識や視野を持ち、学び研究することを主な目的として活動しています。

今年度の大きな活動は2つでした。

7月9日から10月20日まで国立新美術館で行われた「オルセー美術館展 印象派の誕生 一描くこと

の自由―」を10月4日に見学しました。フランスのパリ・オルセー美術館から来日した絵画を観ることが出来る貴重な機会でした。「印象派とは何か」「絵画から何を感じたか」「どのような技法が使われているか」などを各々色々なことを考えながら見学し、見学後は興味を持った作品についてどう感じたかなども話し合いました。

10月24日には、鎌倉彫会館内にある鎌倉彫資料館へ見学に行きました。鎌倉彫は神奈川県伝統的工芸品に指定されています。「鎌倉彫はどのようにできたのか」「現代の生活にどのように溶け込んでいるか」など意見を言い合いながら時間をかけて見学しました。鎌倉時代は木彫彩漆の仏具、江戸時代は茶道の道具、時代に合った体系をとることも重要なのだと知ることができました。

今年度の活動は少なかったので、来年度は活動を増やし、見学だけでなく作品を作るという体験もしていければと思います。

美術工芸研究部会の所属者だけでなく、他の研究部会の人や一般の学生でも参加したい活動があれば気軽に参加してもらえるような活動をしていこうと思います。

宗教研究部会

私たち宗教研究部会は、創設9年目の研究部会です。他の部会と比べてまだ新しい研究部会です。寺院や神社の巡検、史跡の巡検、宗教にまつわる博物館見学などを中心に活動しています。

今年の活動で訪れた場所は史跡称名寺、サントリー美術館、明治神宮を訪れました。

史跡称名寺は、称名寺は13世紀半ば、北条実時によって建立された。現在の神奈川県立金沢文庫は、1277年に北条実時により境内に建立された。実時の遺志は、顕時・貞顕・貞将の3代にわたり、膨大な書籍を遺された。現在の収蔵資料の多くは、金沢北条氏の金沢文庫にあった資料と、称名寺に伝わった貴重な資料がございます。

当日は、特別展「徒然草と兼好法師」を行い、教科書等でおなじみの兼好法師像を始めた金沢文庫の徒然草コレクションを中心に、他機関等の資料を交えて紹介され、中でも鶴見大学図書館蔵の貴重資料を貸出していた。

サントリー美術館は、「高野山開創1200年記念高野山の名宝」展を見学し、高野山が平成27年(2015)に開創1200年の節目を迎えることを記念して、高野山に伝わる至宝の数々を公開された。

空海ゆかりの宝物から、真言密教の教理に基づく仏像、仏画など、重厚な信仰の歴史を物語るものが展示された。

今年度の活動は3回ですが、来年度は1ヶ月に1回の活動をし、部員たちの意見を取り入れた巡検の計画を考えています。宗教好き、嫌いは問いません。入部したい方、迷っている方は、ぜひ来てください。

うるし研究部会

うるし研究部会は今年で創設2年目となりました。部員数は23名、毎週木曜日の放課後、6号館保存処理室で活動しています。漆を使った作品の制作や夏休みを利用した漆の産地見学での体験学習を通して、実践的に漆について深く学ぶことを活動理念としています。

主な活動内容として、前期にナヤシとクロメ作業・夏休みの漆産地見学を行い、後期にはフラッグ制作・卒業制作を開催しました。

ナヤシとクロメ作業は、攪拌して漆を均一にするナヤシと生漆に含まれる水分を日光に当てて取り除くクロメを行う精製法です。これは、漆を扱いやすくするための作業で、6月上旬の天候の良い日に6号館で行いました。

夏休みを利用して1泊2日の日程で、長野県木曾平沢を訪れました。漆塗りの山車の修復現場や木曾漆器の制作工房を見て回り、職人の方々から貴重なお話を伺いました。木曾漆器館では、漆の制作に用いられる工具や木曾で制作された漆芸品の見学、普段ではできない素晴らしい体験をしました。

後期は、鶴見区の豊岡商店街協同組合と鶴見大学が共同で行っている地域交流活動の一環としてフラッグ制作を行いました。今年、うるし研究部は初参加でした。テーマは「和」でそれぞれ思いのこもった作品を作りました。

昨年度は新入生の方々が興味をもって頂き、新しいことにも挑戦した1年となりました。今年度は、もっと多くの方に本研究部会を知って頂けるように多方面でも活躍していきたいです。



鶴見大学文化財学会会則

1. 本会は鶴見大学文化財学会と称する。
2. 本会は鶴見大学文化財学科教職員・学生および卒業生、その他の関係者をもって組織する。
3. 本会は文化財にかかわる人文・自然諸科学の学問交流を活発化し、会員相互の研究を推進し、かつ親睦をはかることを目的とする。
4. 本会は総会を毎年一回開く。ただし必要に応じて随時会長がこれを招集することができる。
5. 本会はその目的を達成するために次の事業を行う。
 - 1 研究等の発表
 - 2 講演会の開催
 - 3 会誌・会報等の編集発行
 - 4 研究部会活動
 - 5 HP上での広報活動
 - 6 親睦その他の事業
6. 本会に次の役員を置く
 - 1 会長（1名）は学科長に委任し、本会を代表し会務を統括する。
 - 2 委員（若干名）。委員は諸事業の企画運営に携わり、会員間それぞれで互選する。任期は一年とし留任を妨げない。
7. 本会の経費は会費（年額千円）、寄付金その他の収入をもってこれに充てる。
8. 本会の事務所は下記におく。

〒230-8501
神奈川県横浜市鶴見区鶴見2丁目1番地3号
鶴見大学6号館文化財学科合同研究室

付 平成11年10月16日から発足する。

付2 平成16年4月1日 一部改正

付3 平成23年4月1日 一部改正

平成27年度の年間行事予定

●春季講演会

日 時：6月6日（土）

総 会：午後1時から

講演会：午後3時から

会 場：鶴見大学会館メインホール

テーマ：「洋風画から油絵

—西洋と東洋の彩色技法・材料の出会いと融合」（仮）

講 師：武田 恵理先生

（文化財保存修復スタジオ）

●秋季シンポジウム

日 時：11月7日（土）午後1時から

会 場：鶴見大学会館メインホール

テーマ：「鎌倉の考古学」（仮）

講 師：河野 真知郎先生（本学教授） 他

■お問い合わせ

045(580)8139 文化財学科 合同研究室

編集後記

今年度、無事に文化財学会報を刊行することが出来ました。大変お世話になりました多くの方々へ、篤く御礼申し上げます。この会報をきっかけに少しでも文化財学会を知っていただければと思っております。（井坂記）

無事、文化財学会報16号を刊行することができました。快く執筆を受け入れて下さった方々、又、手とり足とり仕事を教えて下さった先輩方にお礼を申し上げます。来年度は自分達が後輩から感謝されるよう、頑張ります。（大宮記）

連絡先

〒230-8501 神奈川県横浜市鶴見区鶴見2丁目1番地3号
鶴見大学 文化財学会
TEL:045(580)8139
URL:<http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/bunkazaigakkai/index.html>
E-mail:bunkazai@tsurumi-u.ac.jp